人とイノシシの関係と共生の可能性

― 神戸市における「イノシシ餌付け禁止条例」に関連して ―

布施　綾子

キーワード：　イノシシ，神戸市，共生，餌付け禁止条例，環境思想，環境倫理，動物地理

1.　研究の背景と目的

平成 14 年 3 月 28 日，神戸市において日本初の「イノシシ餌付け禁止条例」が制定された。神戸市には都市域が多く存在し，地理的には山と海が接近している為に平地の面積が非常に少なく，六甲山南部に位置する市街地は東西に広がり，比高差が相当ある。近年，住宅地増加の為，山を切り開き，道路は整備されアスファルト化が進んだ。その結果，人口が増加している中で，野生動物であるイノシシと人とのトラブルが増加した。その解決策の一つとして制定されたのが，「イノシシ餌付け禁止条例」である。その目的は，人によるイノシシの餌付けに起因する，都市部におけるイノシシの出没頻度の増加を防ぐことにある。本論では，まず，神戸市民にとっては非常に身近な野生動物であるイノシシと人間の関係を探る。日本人の動物観に影響を与えたと考えられる東洋と西洋の環境思想を概観する。次いで，人とイノシシの関係の歴史をたどり，人がどのようにイノシシと共生してきたかをみる。その上で，今後の野生動物と人との関係の在り方を提示し，餌付け禁止条例が人と野生動物にとって正しい選択であったのかを問い，この事例を基礎として，人と野生動物との関係はどうあるべきかを考察する。

2.　現地調査

2009 年 9 月～12 月に，神戸市東灘区の天上川流域において，80 名にインタビューを行い，イノシシの出没地点の調査を行った。同付近に，イノシシの出没現場の調査ルートを 7 ヶ所設定し，計 140 回の踏査を行った。また神戸市の住民 52 名にアンケート調査を行う（回収率 75%）と共に，筆者が 2000 年～2001 年に調査したイノシシの出没地点に関するデータと比較し，考察を加えた。現地踏査は神戸市土木局から提供を受けた天上川の河川構造資料に基づいて行い，調査地域の土地利用を中心とする自然環境変遷状況の把握には，1948 年，1949 年，1964 年，2001 年の空中写真と地図を利用した。

3.　結果及び考察

現地調査では，天上川流域において住民による餌付け行為が続けられていて，河床に住み，夜間も山に帰らないイノシシが確認できた。住民の中には，イノシシの個体識別を出来る人が多く存在し，地域住民が日常的にイノシシと関わりを持っていた。意識調査では，41%の人がイノシシは可愛いと答えたが，自分の町に居て欲しいと答えた人は 10%に留まった。この事から，イノシシへ好意的な感情は，近隣にイノシシが存在して欲しいという意識とは共存するものではないという事が明らかになった。インタビューでは，75%の人が餌付け禁止条例の存在を認識していた。また 2000～2001 年及び 2009 年のイノシシ目撃地点を比較した結果，道路でのイノシシ目撃件数は減少傾向にあった。ゴミ集積所の使用状況の改善も出没減少の理由の一つであると考えられたので，餌付け禁止条例は有効であったことがうかがえる。居住年数別にイノシシへの意識の比較を行った結果，居住年数が長いほどイノシシに対し寛容な事が明らかになった。イノシシを害獣とみるかは人の意識や態度によるものであり，人のイノシシに対する経験によってイノシシの捉え方が異なるものと推察された。調査から、住民はイノシシを「害獣」と捉えるだけでなく，「愛護動物」「狩猟対象」「肉」「神」など様々な捉え方をしている。人とイノシシがトラブルを回避し共生するには，人が野生動物に対して知識を持ち，最低限の守るべきルールを共有する必要がある。今回，人とイノシシの歴史を辿る中で，イノシシに関しては一貫して人がイノシシを利用してきた事が明らかになった。人とイノシシの間で互いに利益のある共生は難しいのではないだろうか。狩猟禁止区域である神戸において，住民は様々な工夫をしながら知恵を持って共存を試みてきた。野生動物との共存・共生は，地理的環境や文化的背景などに従って対応が求められ，且つ，人間が歩み寄るという姿勢が必要である。これには一定の時間を要するであろうし、また動物種により人との共生の可能性も異なるものとなろう。